

■肢体不自由のある子ども・院内学級の子どもへの実践事例

肢体不自由のある子どもたちや 院内学級の子どもたちの可能性を伸ばす —マルチメディアDAISY活用の試み

東京都立光明特別支援学校・東京都立光明特別支援学校そよ風分教室
達 直美・矢下 容子^{つじ}・禿 嘉人^{かむろ}

はじめに

本校は、肢体不自由のある子どもたちが多く学んでいる特別支援学校です。また、国立成育医療研究センター内に院内学級として、療養中の子どもたちが通うそよ風分教室が設置されています。

今年度は、「児童・生徒一人ひとりの能力や可能性を十分に伸ばし、豊かな人間性と生きる力を向上させ、自立と社会参加を目指す」を理念に掲げ、子どもたちの可能性を信じて最大限に伸ばし、それぞれの役割に応じた自立と社会参加を目指しています。

教育目標は、以下の通りです。

- ① 健康で安全な生活を送るための力を身につける。
- ② 自ら学ぶ意欲と確かな学力を身につける。
- ③ 豊かな感性を育み、心豊かに生活できる力を伸ばす。
- ④ 互いの人格を尊重し、社会の中で協力・協働していく力を育む。

マルチメディアDAISY図書の活用は、②と③に深く関わるものと考えます。一人ひとりのニーズに応じた教育実践が求められる中、基礎・基本の学習力、コミュニケーション力、情報収集力をつけることにつながると考えます。

肢体不自由のある子どもたちにとって、障害特性から、生活体験・社会体験が少ない状況にあると言われていています。本を読むことで、世界を拡げ、いろいろな事柄への興味・関心や学習への意欲などにつながると考えますが、上肢に麻痺などがあり、視覚にも配慮が必要な多くの生徒は、ページをめくりに困難を抱えたり、文字が小さいと読み取ることに困難を感じたりする状況があります。

そういう中で、読書をする習慣や興味・関心を拡げるために、iPadでマルチメディアDAISY図書の活用を行っています。

中学部での活用

(1) 研究テーマ

「肢体不自由の子どもたちの可能性を伸ばすマルチメディアDAISYの試み」

(2) 研究目的

肢体不自由の子どもたちの可能性を最大限に引き出すための個に応じたマルチメディアDAISY図書の活用を行う。

- ① 本に親しみ、興味・関心を広げる。
- ② 学習への意欲を高める。

今年度は、生徒の実態およびねらいと、マルチメディアDAISY図書の活用の関連性をICFの概念図を用いて整理することを研究目的としました。

(3) 活用の概要

①対象：中学部の生徒

教育課程：

自立活動を主とする教育課程

知的障害を併せ有する教育課程

②活用の場面

学校：

個別学習の時間・生活単元学習の時間・職業家庭の時間・給食時間など

③活用に際しての配慮

- ・生徒の実態に応じて、作品を選ぶ。
- ・活用する場面に応じて、作品を選ぶ。

④活用に際して期待する学習効果

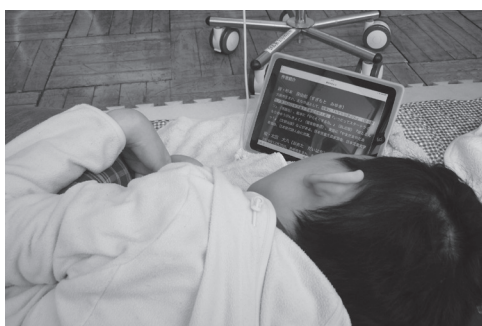
- ・学習の意欲が向上する。
- ・自己肯定感が育まれる。
- ・余暇活動が広がる。

(4) 活用の実際

〈豊かな感性を育み、心豊かに生活する教育目標の具体的実践〉

【自立活動の過程で学ぶAさん】

言語で意思を表すことができないため、気持ちなどは表情で読み取ります。日常的に医療的ケアが必要で、学習活動は体調に左右されることが多くあります。給食時は口鼻腔による経管栄養があり、一定の時間、横になりながら安静にしているので、その注入の時間に、本の読み聞かせを行っています。



①本の選択への配慮

Aさんの障害は後天性のものであるため、内言語は多いのではないかと推測しています。発達年齢に応じた内容

の本ではなく、生活年齢に応じた本や、Aさんの目の表情や微妙な手の動きで関心度を測りながら本を選択しています。

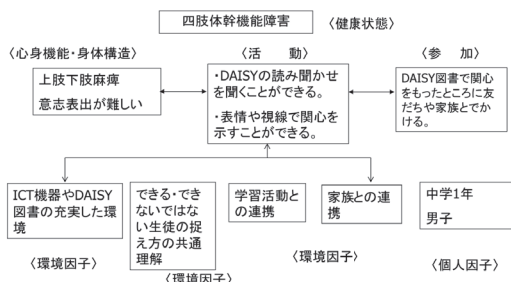
② Aさんが気に入っている本

『図解 東京スカイツリーのしくみ』

『東京モノレールシリーズ (4～7)』

③ わいわい文庫とAさんのICF(*注1)

図1 Aさんとわいわい文庫の関連をICFで考える



★わいわい文庫の活用で、Aさんが興味・関心のある場所に出かけ、生活がより豊かになることに期待しています。

〈自ら学ぶ意欲と確かな学力をつける教育目標の具体的実践〉

【知的障害を併せ有する教育課程で学ぶBさんの実践例】

言語で意思を伝えることができ、国語・数学などの基礎的学習に取り組むことができます。スポーツやゲームなどに関心があり、学年の仲間のリーダー的存在です。視力が弱いため、視覚的配慮が必要です。



① 本の選択への配慮

Bさんは通常の小学校で学んだ後、本校の中学部に進学しました。今までの基礎学力を維持しながら、学習への意欲を向上していくことが求められます。教育課程上、教科学習が少ないところを読書などで補う必要があります。

② Bさんが気に入っている本

おもに図鑑などを自ら選択している。

『海の中をのぞいてみよう』

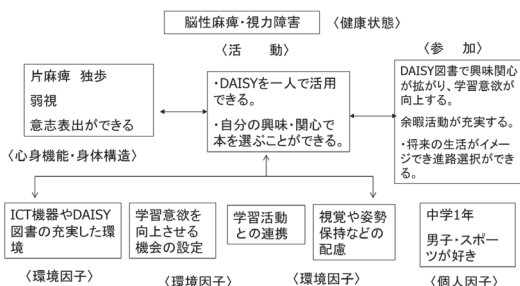
『海の中のかくれんぼ どーこだ』

『東京モノレールのこれまでこれから』

『日本昔話の旅』 その他

③ わいわい文庫とBさんのICF関連図

図2 Bさんとわいわい文庫の関連をICFで考える



★わいわい文庫の活用で、Bさんの余暇活動が充実したり、将来の進路選択の幅が広がったりすることに期待しています。

【学習の導入などで活用する実践例】

書道教授を外部講師として招聘し、2016年1月に書き初めを行いました。その学習の事前学習として、マルチメディアDAISY図書で干支の話を伝えました。また、今年の干支や来年の干支の申や酉を意識できるように、それにまつわる話の読み聞かせなどを学習に取り入れました。

①対象

自立活動を主とする教育課程および知的障害を併せ有する教育課程に学ぶ生徒

②学習指導の流れの例

生活単元 「来年は酉年！書き初めをしよう」

ア 目的

- ・干支の話をみる・聞くことができる。
- ・十二支や来年の干支「酉」に関心をもつことができる。
- ・甲骨文字で習字を楽しむことができる。
- ・筆をもつことで上肢の操作性を高める。
〈自立活動を主とする教育課程の生徒〉
- ・十二支の物語に親しみ、甲骨文字で習字を楽しむことができる。
〈知的障害を併せ有する教育課程の生徒〉
- ・十二支の物語に親しみ、干支に関心をもつことができる。

- ・来年の干支を知り、甲骨文字で習字を楽しむことができる。

イ 活動の流れ

- 1：はじめの挨拶
- 2：本時の学習のねらいを伝える
- 3：干支の話をマルチメディアDAISY図書で見る・聞く
- 4：来年の干支を伝える
- 5：甲骨文字の手本を掲示する
- 6：「酉」の甲骨文字3種類から好きな文字を選び墨汁で書く
- 7：各自の書いた文字を発表
- 8：終わりの挨拶

ウ 指導上の留意点

- ・集団での一斉指導を行うため、大型モニターでマルチメディアDAISY図書を見る。ストレッチャーの生徒には、手元でiPadの画面を見せる。
- ・干支に関心をもてるように、十二支がそろった画面で静止し、干支の絵を示し、群読する。また、関心をもてるように、生徒の生まれ年の干支を伝える。
- ・来年の干支を意識できるように「酉」の干支の場面を静止する。
- ・生徒が文字に関心をもてるように、甲骨文字の手本を活用する。
- ・手本を何度も活用できるようにラミネートする。生徒の実態に応じて書見台やバインダーを活用する。

- ・達成感がもてるように各自が書いた文字は台紙を貼り掲示する。
- ・生活に般化することに期待し、家に書いたものを持ち帰る。

★生活体験・社会体験の少ない肢体不自由の生徒にとって、読み聞かせや知識の補充だけでないわいわい文庫の活用を創意工夫していきたいと思います。

(5) 成果と課題

中学部では、一定の時間を決めて継続指導することが難しい状況にあります。そこで、自立活動や知的障害を併せ有する教育課程では、生活単元や課題別の学習に加え、給食の時間などにも活用しました。

また、単に本を読むだけでなく、マルチメディアDAISY図書を他の教科や活動につなげることで学習の幅を拡げることができ、そのことで生徒の興味・関心を促すことができました。

生徒の実態に関わらず、何を目的に取り組むのか、ねらいを定めて実践できたことは成果の一つとなりました。そのような中で、意思を表出できない生徒が、自分の気に入った本を良い表情で表したり、視線が本に向けられじっくり聞き取ったりしている様子が観られることを、学年の教員間で理解できたことも成果の一つです。

経験・体験不足が否めない肢体不

自由のある子どもたちにとって、マルチメディアDAISY図書活用の可能性を教員間に啓発しながら、今後も豊かな感性と自ら学ぶ意欲を育みながら取り組んでいきたいと思います。

院内学級での活用

(1) 院内学級での研究テーマ

肢体不自由特別支援学校におけるキャリア発達の視点を踏まえた系統性のある授業づくり ―自立と社会参加を実現するための教育システムの構築及び教育プログラムの開発

(2) 研究目的

病気治療のため長期入院中の子どもがさまざまな本に触れる中で、興味や関心の幅を広げていく。

(3) 研究準備

きわめて障害の重い小6のSくんを対象とすることから、読む速度がゆっくりのものを選び、声に抑揚があるかないかで聞き比べをしました。わいわい文庫の『あいうえおにぎり』『コッケ モーモー！』で比べることにしました。

(4) 活用実態

対象：授業

場所：ベッドサイド（教室に登校できないため、病室内で実施しました）

(5) 様子や効果、特に前年度からの変化

昨年度から、SpO₂(*注2)や心拍に変化がみられるかを確認しながら実践を行っています。昨年度は、『くださいな』を繰り返し活用し、声の変化を感じ取ることができました。今年度は『あいうえおにぎり』『コッケ モーモー!』を選んで聞き比べを繰り返し活用しました。

『あいうえおにぎり』ではSpO₂や心拍に変化が見られないことがほとんどでした。一方、『コッケ モーモー!』では、抑揚の変化があるところでSpO₂や心拍に±1～2の変化が多く見られました。抑揚の変化があることで、その場面の様子等を感じ取っているように思われます。最近では聞き慣れたためか、SpO₂や心拍の変化があまり見られないようになってきました。抑揚に変化のある物語の種類が増えれば、より読書活動を楽しめるようになるのではないかと思います。

病院内で子どもと教員が1対1で行われることが多い授業の中で、紙芝居風マルチメディアDAISY図書のにぎやかな雰囲気は、他では得られにくい貴重な経験になっています。

今後の活用方法と課題

重度の障害のある子どもにとって、いろいろな人の声で読み上げてくれる

音声図書はたいへん重要なものです。変化にとんだわかりやすい物語や抑揚のある物語などは、障害の重い子どもも雰囲気を楽しむことができます。今後も障害の重い子どもたちが楽しめるマルチメディアDAISY図書が充実することを期待しています。

*注1

ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health)は、人間の生活機能と障害の分類法として、2001年5月、世界保健機関(WHO)総会において採択された。この特徴は、これまでのWHO国際障害分類(ICIDH)がマイナス面を分類するという考え方が中心であったのに対し、ICFは、生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えたことである。

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html>

*注2

SpO₂: 動脈血酸素飽和度
血液中の酸素飽和度のこと。